

月23日に宇都宮大学で開催された「多言語による進学ガイダンス」についてです。これは別項に詳しい報告がありますのでご覧下さい。

これから制作される『教員必携 外国につながる子どもの教育』（続編）について、大まかな内容は次のように計画しています。第1部は、多様化する外国につながる子どもに対応するための支援例の提供です。支援対象の子どもについては「日本で生まれた子ども」「小学低学年で編入した子ども」「中学で編入した子ども」などいくつかのモデルを設定し、どのような場面でのどのような支援が効果的かという視点での実践例を提案します。第2部は、HANDS プロジェクト事業の「多言語による進学ガイダンス」や「外国につながる子どもの進路調査」などの成果を活用し、学級担任段階で実施可能な進路指導についての具体的な提案や保護者に提供できる翻訳資料の提供、外国につながる子どもの教育や進路に関する有効なデータの紹介を予定しています。第3部では、実際の支援例を体験談という形で紹介します。成功例だけでなく失敗談も含め、幅広い立場の支援者にとって参考となる情報を提供したいと考えています。

今回の会議に先立ち、参加者に対して事前に課題をお送りしました。前述の第1部の概要を紹介した上で、効果的な実践例を持ち寄るという課題でした。校務多忙の中、多くの出席者から回答の提

出が得られました。提出された実践例は初期指導的な内容に加えて、学習指導の方法に関する内容が大変目立ちました。外国につながる子どもの多様化や定住化に伴って、支援の現場は学習支援が中心になりつつあることを表しているようです。

協議はグループ形式で進められました。課題に対する全回答をコピーして参考資料として配布し、第1部の構成を見据えた、子どものモデルケースや場面別の効果的な支援について具体例を作成するという内容でした。設定を絞り込んだ提案は多少の困難を伴いましたが、多くの素晴らしい提案が出されました。外国人児童生徒支援会議にとって『教員必携～』の刊行はあくまで副産物であり、本来の目的はここに集った拠点校教員の皆さんが多くの情報を見聞き、より良き支援について共に考え、新しいヒントを持ち帰ることにあります。その点からも意義のある協議だったと感じています。

今年度の外国人児童生徒支援会議は2月に実施される第3回を残すのみとなりました。11月中に組織される作成委員会を中心とした作業を経て『教員必携 外国につながる子どもの教育 実践例・進路』（仮題）として具体的な内容が提示される予定です。昨年度の支援会議を経て完成した『教員必携 外国につながる子どもの教育 Q&A・翻訳資料』に続く、有効な教員用手引き書を完成させたいと思います。

「多言語による高校進学ガイダンス」 開催報告



宇都宮大学国際学部 教授
HANDS プロジェクト 研究代表

田 巻 松 雄

10月23日（日）に「多言語による高校進学ガイダンス」を開催しました。昨年に引き続き2度目の開催です。このガイダンスは、日本語を母語としない子どもたちと保護者を対象にして、日本の教育制度や高校受験に関する情報を正確に提供することを目的にするものです。中学生と保護者を含む当日の

参加者については、5ページをご覧ください。昨年より参加者は減っていますが、11月13日に真岡市で同様のガイダンス（HANDS プロジェクトと真岡市教育委員会共催）が開催されることが影響していると思われます。また、今回は鹿沼東高校の国際理解部のフレッシュな面々が参加してくれました。

内容は昨年と同様に、第一部テーブル（日本語を含む7か国語）ごとのガイダンス、第二部全体質疑、第三部体験談から構成されました。資料は、「より大事な情報をより分かりやすく」を目指し、昨年作成したものの改訂版をつくりました。



全体質疑で出された主な質問は、以下の通りです。

(1) 高校入学後にかかる費用について、(2) 単願と併願の違いについて、(3) 公立中学校でのマンツーマンでの取り出し教科補充指導の不安、(4) 来日1ヶ月の受検生はどういう高校を目指せばよいのか、(5) 英語を専門に学べる県立高校やインターナショナル校は県内にあるか、(6) 栃木県内の私立高校の情報はどこで得られるか、(7) 高校一日体験や高校での説明会に日本語がよく分からない外国人親子が参加した場合の対応は、(8) 調理師希望だが、高校で資格取得可能か、(9) 県立高校入学後の親の転勤等による転校転学について、(9) 専門学科からの大学進学の可能性は、(10) A措置とB措置の受検資格・受検内容、(11) フレックス選抜とは。

参加者からはおおむね好評をいただきました。すなわち、アンケートで、保護者・見学者17人中14人が満足（やや満足が3人）と答え、児童生徒11人はすべて満足と答えてくれました。基本的な情報を正確に提供するという目的はほぼ達成できたのではないかと思います。個人的な感想としては、全体質疑の司会が大変だったこと、全体質疑はもう少し工夫できるのではないかと感じました。

まず、第一部のガイダンス終了後、各テーブルから全体質疑に向けて多くの質問が出たことを確認し

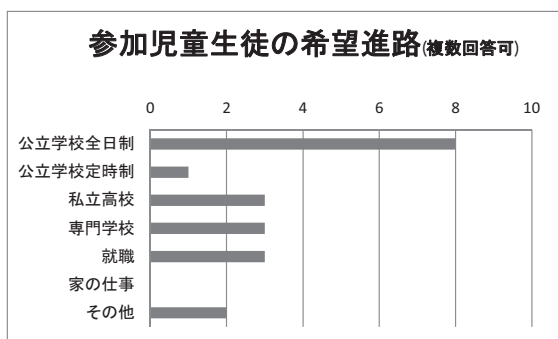
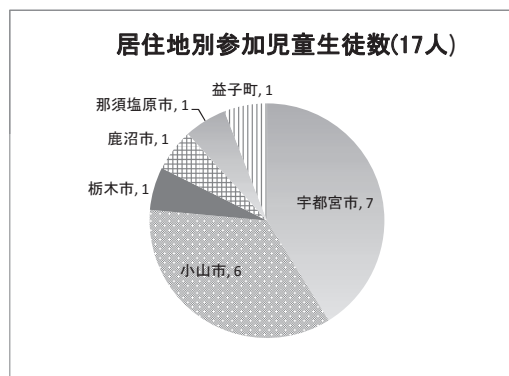
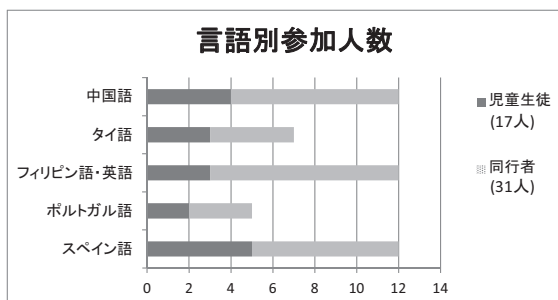
ましたが、時間の関係上、質問を各テーブル2つに限定せざるを得ませんでした。それでも、10を超える質問が出て、1つ1つの質問に対して時間的にあまり丁寧な回答を提供することができなかったと感じます。回答者の意見にも、もっと丁寧に答えなかったというものがありました。一方で、回答者が丁寧に答えた場合、これだけの内容を短い時間で通訳するのは大変ではないかと思える場面もありました。

正直、進学ガイダンスの準備は大変です。資料改定版作成のために何度も会議を開催しました。今回も翻訳者・通訳者をはじめ、多くの学外関係者の協力を得て開催することが出来ました。現在は大学主体の形で進めていますが、ガイダンスを継続させていくためには、自治体・学校・大学の連携ネットワークのより良いあり方を検討していく必要を感じます。12月3日のフォーラムでも、ガイダンスのあり方について話し合います。どのようなガイダンスが必要とされるのか、この点を検証しながら、栃木県にはこんな素晴らしいガイダンスがあると評価されるようなものを作り上げていきたいと思っています。



7言語（日本語・ポルトガル語・スペイン語・フィリピン語・中国語・タイ語・英語）によるガイダンス資料

参加者アンケート結果 (抜粋)



「多言語による高校進学ガイダンス」に参加して



栃木県立鹿沼東高等学校 英語国際理解部

川嶋 沙妃
金子 真理

私たち英語国際理解部の6名は、会場準備・片付け、記録係りとして、このガイダンスに参加しました。また、このうちの2名が卒業生の体験談での司会を務めました。ガイダンスに参加する前はあまりよく分かっていなかったのですが、参加してみて県内の外国人児童生徒の現状を知ることができました。

私たちの部活は、夏休みに東京のJICA 地球ひろばやユニセフハウスなどを訪問し、世界には学校に通えない子どもが多くいるということを知りました。しかし、ここ栃木県にも思うように高校進学できない子どもたちがいるということを知り、驚きました。「高校の教科書はいくらですか?」「私立の単願と併願の違いはなんですか?」次々と質問が出てき

ました。他の中学生なら当然知っているようなことも分かっていない様子でした。言葉が通じないせいで、授業についていけない。高校自体を理解できていない。そんな現状を目の当たりにしました。

国際理解というと、遠い海外を思い浮かべてしまいがちですが、自分の身近にいる困った子どもたちに手を差し伸べることも大切だと改めて気づきました。通訳の方、国際交流協会の方、プロジェクトの方、教育委員会の方、宇都宮大学の学生の方、皆さんが協力しあって、外国人児童生徒を支えていることに感動しました。

私たちも、ここ栃木県の外国人児童生徒のために力になりたいと思うようになりました。